

令和元年6月27日現在

機関番号：23101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26463347

研究課題名(和文)脳血管疾患患者の移乗時見守りから自立へのプロセスを支援するケアプロトコルの開発

研究課題名(英文)Development of a care protocol to support a process of bed-wheelchair transfer independence in stroke patients

研究代表者

高柳 智子 (Takayanagi, Tomoko)

新潟県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：90313759

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：全国の回復期リハビリテーション病棟でリーダー業務を担っている看護師(各病棟1名)に自記式質問紙調査を実施した。334名から質問紙の返送があり(回収率59.0%)有効回答329名(有効回答率98.5%)であった。遠位見守りを「取り入れている」もしくは「取り入れる場合と取り入れない場合がある」と回答した者と、「取り入れていない」と回答した者は、ほぼ同数であった。「取り入れていない」理由として、遠位見守りでは転倒等の危険を回避できないからが最多であった。

回復期脳血管疾患患者を対象に、移乗時見守りから自立の過程で得た経験知について半構成インタビューを行い、7カテゴリーが抽出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

脳血管疾患患者のベッド・車椅子間の移乗時見守りから自立に向けて援助する過程において、見守りを直ぐに手を出せる距離で行う近位見守りと遠目から見守る遠位見守りがあり、この2つの見守りの適用について看護師への質問紙調査から明らかにすることができた。また、ベッド・車椅子間の移乗が見守りから自立へと至った回復期患者の経験知を解明することにより、患者が自身の移乗をどう捉え努力しているのかを知る必要性や病棟で24時間の生活支援を行う看護師だからこそできる支援内容を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：A self-administered questionnaire survey was conducted involving nurse leaders(one from each facility)working on the convalescent rehabilitation wards in Japan. A total of 334 questionnaires were returned(response rate: 59.0%), and 329 valid responses were obtained(valid responses: 98.5%). The number of subjects who answered that they “perform” or “occasionally perform” within-eyesight observation and that of subjects who answered that they “not performing” it was <within-eyesight observation is not sufficient to prevent the risk of falls>.

Semi-structured interviews were conducted with 11 patients with cerebrovascular disease hospitalized in convalescent rehabilitation wards. Their experience-based knowledge was represented by 7 categories.

研究分野：臨床看護学

キーワード：脳血管疾患 移乗 見守り 自立 看護

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

実用歩行が困難で車椅子を主たる移動手段とする脳血管疾患患者にとって移乗動作の自立は、排泄をはじめとする生活行動の自立と大きく関係し、自宅退院を可能とする大きな要因である。回復期にある脳血管疾患患者の移乗自立に向け看護師は、全面介助、部分介助、見守り、自立へと患者がステップアップできるよう、対象の能力に合わせたケアを提供する。特に見守りにおいては、患者本人の力を引き出す目的で安易な手出しを行わず、安全に配慮しつつも本人の主体的な動きを尊重した姿勢が求められ、自立支援と転倒予防の両面において重要な役割を担っているケアである。しかし、脳血管疾患患者は運動機能が回復した後も、記憶障害や注意障害をはじめとする高次脳機能障害の合併により、常に安定した移乗を遂行できるとは限らない不安定さがあり、見守り解除の意思決定に躊躇する看護師は多い。

高柳ら(2013)は、熟練看護師の脳血管疾患患者の移乗時「見守り解除」のアセスメント視点を、フォーカス・グループ・インタビューにて明らかにした。次いで、専門家パネルによる内容妥当性の検討を通して、移乗時「見守り解除」アセスメント指標の洗練化を図った(高柳, 2013)。続いて、回復期リハビリテーション病棟での前向き調査により、看護師の移乗時「見守り解除」臨床判断に関連のあるアセスメント項目を見出した(Takayanagi, 2010)。さらに、見守り解除後の追跡調査にて、見守り解除後の転倒発生に有意に関連していたのは、「発症から回復期リハビリテーション病棟転入までの期間」と「安全に移乗できない環境では他者に援助を依頼できる」の2つであった(高柳ら, 2011)。これらの研究より、看護師が移乗時「見守り解除」の臨床判断で用いる情報と、実際に見守り解除後の安全な移乗の予測に役立つ情報は必ずしも一致していないことが推察でき、見守り解除後にも安全かつ自立した移乗を遂行していくには、各移乗場面において危険認知できる能力と必要時には他者の援助を依頼できる姿勢の必要性が示唆されている。このことから、看護師の臨床判断だけでなく患者自身から移乗時の見守りから自立への過程において、どのような経験や学びを得て移乗自立へと移行できたのかを明らかにし、ケアに取り入れていくことが重要と考えられた。

2. 研究の目的

回復期にある脳血管疾患患者の移乗動作において、最小限の身体介助である見守りから移乗自立へと支援していく過程におけるケアプロトコルを開発し、その有効性を検討する。

3. 研究の方法

(1)回復期脳血管疾患患者のベッド・車椅子間移乗の見守り支援から自立への移行過程における遠位見守りの使用実態

全国 437 施設の回復期リハビリテーション病棟 566 病棟でリーダー業務を担っている看護師(各病棟 1 名)に自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、回復期にある脳血管疾患患者のベッド・車椅子間の移乗における遠位見守りの実施状況およびその方法、遠位見守りの解除を判断する患者の状況とした。選択回答は単純集計を行い、自由記述は頻出キーワードを投入しクラスター分析を行った。

(2)ベッド・車椅子間の移乗時見守りから自立に至った回復期脳血管疾患患者の経験知の抽出

研究参加者：A 県の 2 施設の回復期リハビリテーション病棟に入院中の脳血管疾患患者のうち、当該病棟入院中にベッド・車椅子間移乗が見守り支援から自立に至った患者で、言語的コミュニケーションが可能であり 30 分程度のインタビューへの受け答えが可能なる者とした。

データ収集方法：同意の得られた研究参加者に対して、診療記録および看護記録から、年齢、診断名、発症からの経過月数、回復期リハビリテーション病棟転入からの経過月数について情報を得た。また、1 回 30 分程度の半構成インタビューを行い、ベッド・車椅子間の移乗で留意していること、移乗時の見守りを受けていた際の看護師の支援で移乗自立に役に立ったと感じていることについて、自由に語ってもらい、参加者の同意を得て IC レコーダーに録音した。

分析方法：IC レコーダーに録音したデータから逐語録を作成し、質的に分析した。まず、全体を精読し、参加者個人の経験から得た学びが語られている内容をまとまりごとに区切り、コード化した。次いで、上記のコードを類似性ならびに相違性に着目して類型化を繰り返し、サブカテゴリ、カテゴリーを導き出した。

4. 研究成果

(1)回復期脳血管疾患患者のベッド・車椅子間移乗の見守り支援から自立への移行過程における遠位見守りの使用実態

回答者は 334 名であり(回収率 59.0%)、対象の基本属性ならびに勤務病棟の遠位見守りの使用実態に関する内容において欠損データがない質問紙を有効回答とした結果、有効回答 329 名(有効回答率 98.5%)であった。

対象の回復期リハビリテーション病棟勤務年数は 5.2 ± 3.3 年、臨床看護実践年数は 17.3 ± 8.0 年であった。また、勤務病棟の病床数は 50.1 ± 35.9 床であった。遠位見守りを「取り入れている」111 名(33.7%)、「取り入れる場合と取り入れない場合がある」55 名(16.7%)、「取り入れている」163 名(49.5%)であった。1 名(33.7%)、「取り入れている」と回答した理由として最多であったのは、遠位見守りでは転倒等の危険を回避できないから (79.8%)であった。遠位見

守りを解除して移乗自立へと移行してよいと判断する患者の状況に関する自由記述から頻出キーワードをクラスター分析し、【転倒・離棟のリスクに対するスタッフ評価の一致】【車椅子のブレーキ・フットレスト操作の定着】の2クラスターが抽出された。

以上より、遠位見守りの実施方法の一部は近位見守りと一致しており、本来であれば近位見守りが適切な患者に対しても行われていることが推察された。転倒予防を目的に遠位見守りを用いる場合は、他の予防対策との併用が必要と考えられた。

(2) ベッド・車椅子間の移乗時見守りから自立に至った回復期脳血管疾患患者の経験知の抽出

研究参加者は、男性7名、女性4名で、年齢は50歳代から80歳代であった。診断名は、脳梗塞6名、脳出血5名で、インタビュー時は発症から2~6か月経過しており、回復期リハビリテーション病棟に転入して1.5~4.5か月経過していた。患者がとらえた経験知として、【車椅子のブレーキ操作の定着が移乗自立の絶対条件と心得る】【転倒リスクは皆無にできないことを認識する】【障害による身体特性を意識して動く】【移乗の各局面における自分なりのポイントをつかむ】【確実な移乗手順を遂行するために時間の余裕を確保する】【医療者の判断を受け入れる】【訓練室とは異なる環境での移乗に折り合いをつける】の7カテゴリーが抽出された。

これらより、リハビリテーションの主体である患者が、自身の移乗をどうとらえ、どのような努力をしているのかを、看護師は日々のかかわりの中で把握し、医療者側のADL評価や支援の方向性とのすりあわせを図っていく重要性が示唆された。とくに、【訓練室とは異なる環境での移乗に折り合いをつける】においては、患者から医療者への発信はなく、機能訓練での指導内容と日常生活での移乗動作の乖離を患者自身で折り合いをつけようとしていた。患者が能動的にリハビリテーションプログラムに参画できるよう、患者の学習ニーズの表出を促し、それを実際のプログラムに反映させていくことが重要であり、これらを通して看護師はリハビリテーションの質の向上に寄与できると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 高柳 智子、ベッド・車椅子間移乗が見守り支援から自立に至った回復期脳血管疾患患者がとらえた経験知、日本看護研究学会雑誌、査読有、41巻、2018、733-739
doi: 10.15065/jjsnr.20180116014
- ② 高柳 智子、回復期脳血管疾患患者のベッド・車椅子間移乗における遠位見守り、日本脳神経看護研究学会誌、査読有、39巻、2016、131-140

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

高柳 智子 他、メヂカルフレンド社、看護学生のための疾患別看護過程1 第2版(第4章 脳・神経系の疾患)、2017、214-281

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

- (1)研究分担者
なし
- (2)研究協力者
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。